
『 雨空に七色を 下 』

希菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『 雨空に七色を 下 』

【Nコード】

N7246J

【作者名】

希菜

【あらすじ】

下巻です。

どうぞ最後までお楽しみください。

「あの頃は馬鹿だったんだよ。ああ、今ではマジ笑えてくるくらいに馬鹿野郎だった。」

そう言っている篠崎先輩はすでに少し笑っていました。

さりげなに悲しい声でした。きっと狂った雨の音で多くの人は気がつけなかったでしょう。

でも今の私はなにかわからないその人の何かに、とてもとても引きつけられてしまっていました。

不思議な何かに心を奪われそうでした。

これまで人一倍に警戒心の糸を張ってきた私でも、緊張に意味を感じないほどに、その場が私の肌と同じ温度になっているような、そんな空間。

「今はマジそんなことねえんだけどさ、昔はほんとに人嫌いでした。」

人嫌い？

信じられません。

こうまで私に積極的に詰め寄ってくるこの人が、自分から何が好きだとかいうこの人が、車にひかれそうな私を傘を壊してまで、身を挺してまで助けたこの人がそうなんて全くおもえません。

いったい 昔 というのはどれだけ大昔のことを言っているのか

しょうか？

「その人嫌いってのもさ、実際なんか駄々っ子っぽくって、でもそんなときは本気で思ってたんだよな間違いない。」

先輩の声に耳を傾け過ぎているせいでしょうか？

言葉の合間合間に激しい雨の音が響きます。

「んで、身の周りの奴らがみんなだいつ嫌いで、死ねばいいとかおもってて毎日が地獄だった。」

・・・毎日が地獄だった。

「高校とかもさ、実際は全然期待とかしてなくてどうせ何処行っても同じだろうって、周りのやつなんかみんな同じこと考えてて、いっぱい人が集まれば何処でもいづらいし苦しい。何せ俺と最初から全然違うんだから、って決め付けまくってたんだよ。」

高校？

この人はまだ高校生ですよ？

いったい何があったというんでしょう？

私の頭の中は先ほどの困惑と安心がどろどろと掻き混ぜられているような感覚です。

それと義眼とといった何の関係があるというのですか？

「どうしてそれで目が・・・。」

思わず口に出してしまいました。

日常的に味わっている内側への自己嫌悪とは違う、私は今外へ何より意識を向けてしまっています。

どうして？

これは・・・心理誘導？

「考えてみなよ。」

私の仮面は剥がれ落ちた。

返答はまた意識を揺さぶられるほどに早かった。
考えてみる？

「自分と違う、自分が交われない人間たちの中に放り込まれて、何年も交われないまま、理解できないことが毎日毎日目の前で起る。やめてほしいのに。そんなことやめてほしいのに。目の前で、人が平気で殴られたり、泣かされたり、奪われたり、企てたり、噂したり、馬鹿にしたり、踏みにじられたり・・・。そんな毎日をこれからも見続けなければいけないとしたら、どう思う？」

どうして？

どうしてでしょう？

どうしてなの？

あなたは私のことを、知っているの？

私も同じものを見てきた。同じ視点で。

目をつぶってきた。自分にそれが向かないようにするのが精一杯だった。

でも、実際はずっと向けられてきた。

どうしてもみんなが笑うことに対して酷い、と感じたり嘆いたりして、すぐに輪の中から外されてしまった。私が思うその酷いことの矛先が私に向けられてきた。ずっとずっとそうだった。

わからない。理解できないことが目の前でたくさん起こっていて、私は見ないように、自分が苦しまないでいいように、

中学校の三年間、一度も学校に行ったことはなかった。

家族にも迷惑をかけて、そのうち遠くから私を見るようになって、家にいるときさえも苦しかった。

世の中の何を見ても苦しかった。

それでも頑張ろうとしたけれど・・・。

結局は自分の身を守ることままならない弱い人間で、他人のいがみ合いに安心する汚い、汚い人間でしかないのを思い知らされるだけ。

普通に生活するだけで心に黒濁色の沈殿が積もるわけのわからない生き物でした。

大好きな動物図鑑にも、植物図鑑にも、海洋生物図鑑にも、恐竜図鑑にも、

きつと私という生き物の名前はのってない。

そんなとき私は、私は、どうしようもなく心が黒に染まってゆく。どうしようもなく、

「どうしようもなく、胸が軋むんだ。」

横から見た篠崎先輩は笑っていた。

口は笑顔をつくっていた。
ただ、目が泣いていたの。

義眼でも、涙を流すんですね。私にはそう見えた。

「それで俺は、馬鹿だから、目が見えなくなればいいって思って・
・焼いたんだ。」

先輩がこちらを見た。

泣いてなんかいなかった。

でも、本気で悲しそうな表情。

「でも、やっぱ馬鹿だから片方焼いて気絶しちゃったんだよ。・
・なっさけねえよな！」

突然大きな声をだすのでびっくりした。

先輩は心の闇をなぎ払うように狂気の世界に大声を放った。

そして私はというと、安心していった。

今までにない安心。これまでにない安心。いや、そんなの嘘。忘れていただけ。でもきつと、新しい安心。

そう、篠崎先輩は、似ている。

いいえ。

私は篠崎先輩に似ている。

この安心は他でもない、私が今まで欲しかったもの、求めていたもの。

『共感』・・・それだ。

「でも、俺はそのあと救われたんだ。」

真面目な本気な声。

「ほんとに、運良くな。そんで変わった。」

嘘みたいな、きっと本当の話。

先輩は、この人はもしかしたら、狂気に飲まれた私を見てたとき、私を救おうと思ったのかもしれない。

こんな風に、何も考えてないみたいなのをしながら、私を誘導してくれたのかもしれない。

私は共感を得た。

私はなんにも話していないのに。

この人は一瞬で私の正体を見抜いていたのかもしれない。

笑顔をつくりかけたその刹那、心のビーカーの中に、おおきなおおきな泥団子が落ちた。

「うつ。」

私はとっさに口元を押さえ、胸が膝にくつつくぐらいまで腰を曲げた。

「おい？どうした？」

何が起こったの？

胸で憎らしいほど黒いものが渦巻いた。
なにこれ？

息が上がってくる。何かを吐き出しそうな、心臓を口から吐き出しそうな勢い。

せっかく共感を得たはずなのに、どうして？

拒絶している。

私の中の今まで押し溜めていたものが、沈殿が新しい私を拒絶してる。

・・・いやだ。

憎い、苛立たしい、嫌い、許さない、いままで抱かなかった感情が・・・暴発した。

ばねが弾かれた様に椅子をける。

「あなたは私をただ慰めに来たんですか！？そうなんでしょう！？私があんなところで一人であんなだったから、同情して！勝手に同情なんかして！もう、どうしてですか！？あなたと私は同じなんかじゃないんです！！・・・はあ、はあ。私は汚いんです！汚いんです！！汚れているんです！！私はひとりです！今日いきなり会ったあなたなんかにはわかる分けない！！いいふらすんだ！みんなにいいふらすんだ！！勝手に共感なんかしないで、しないでよ。」

どうして？どうして？

腕が痛い、膝が痛い。椅子から落ちて地面につっこんで、何度も何度も無意識に砂利をたたき続けていた。行き場のない怒りを滞らせることなく吐き出し続ける。

胸が！ビーカーが！割れちゃうよ。

頭上からふりそそぐ声。安心をくれた声。

「ずっとそう思ってきたんだろ？ソコに溜めてきたんだろ？もっと言えよ。ほら、言いたいこと言えよ。」

先輩は、その男は冷静に、目をそらすこともなくむしろ何かを願うように、願うように私をみていた。

何様なの？

今更になつて知った口を利いて、そのうえ放り出すように、軽々

しい物言い。私は頭蓋骨に強力な電撃が走ったように憤りを隠せず、自分が何を考えているのかもわからなくなってきた。

「いいわよ！いうよこの馬鹿！馬鹿！消えてよ！！私は汚いの！何年も考えてやっとわかったのよ！！これしかないって何度も打ちのめされたんだから！あんたなんかに似てない！一緒にしないで！あんたの昔話なんか知らないわよ！ほんとの話かもわかんないじゃない！？私はずっとこのまんま！あんたが救われたって何！？私がどうなるって言うの！？ていうかあんた誰なの！？誰？誰！？おしえ……。」

枯れた喉は掻ききれそうに加熱されて痛み、空気ばかりをが通り抜ける。鳴らすのももう限界だったようだ。当たり前だよ。こんなに叫んだ事、今まで多分ないもの。物理的に鳴らなくなっただ。私は無様にも髪をぐしゃぐしゃにし、頬を痙攣させ、目を剥いて下品に歯を食いしばって、口の端から唾液を流して目からはきつと穢れた汁を垂らしている。

泥団子を無理やり吐き出してまわりに飛び散らせた姿。それはもうがむしゃらに。

間違いなく 全力 で拒絶を表した。これが私の全力。

まあなんて汚い生き物なんでしょう。

やっぱりだ。

私はやっぱり汚いんだ。

これがあるべき姿よ。

外側も内側も同じに汚くなってよかったじゃない？

これで誰も勘違いしない。

一目できつと正体がわかる。

汚い汚い汚い汚い、汚い汚い汚い汚い汚い。

気がつけば右手が世界の境界を越えてその洗礼を浴びていた。

「やっぱり帰ろう。」

私のいるべき世界へ。

何やってんだろ私？

ばっかみたい。

やっぱ今日はそういう日だったんだ。

風紀委員で初めての仕事。

隣の子に誘われてなった初めての委員会。その子に頼まれて他の子のリボンのかけ方を注意した。

学校で決まってるから大丈夫って言うてくれたから、初めて頼ってくれたから、頑張ったのに。

注意した子は

「どうせあいつが言ったんだろっ。」

って私に聞いてきた。

私は答えてしまった。

何にも考えずに答えてしまった。

今思ったら、言い返したその子に私が責められるのが怖かったから無意識に身を守ったのかもしれない。

そのあと隣の子はクラスの女子の多くに責め立てられていた。
囲まれて、泣いていた。

他の男子生徒が

「あの女子、中学でもいじめられてたっばいぜ。」

と軽々しく語っていた。

あときは本当にどうしていいかわからなくて、昔の自分を見て
いるようで怖くって、助けてあげればよかったのかもしれない。

でも私はそうできなかった。

私はそれに目をつぶって走って通り過ぎた。

そのまま走って走って走って走って走って。

雨のなかを走った。

汚くって、自分が汚くって・・・

明日から隣の子にどんな顔をすればいいんだろう。もし二度と学
校に来なくなったらどうしよう。

それをおもったらどうしようもなく自分が汚く感じて・・・

「それで全部？」

もう言い返す心もそうできる身体も私には残ってなかった。

落ち着いてるけど揺れている、そんな感じ。

すつきりなんかしてなくて、ありのまま。

仮面も、我慢も、沈殿も今はないありのままのビーカーの水。

私の心は今ただのビーカーの水に戻った。

「・・・はい。」

地面に頬を擦り付けて、恥ずかしいくらいのかすれ声。

傷だらけの身体。

雨に打たれる手。

きっと私の目は先輩の義眼よりも生気がない。なにも写せてやしない。

どうしていつもこうなんだろう？

ほんと自分が汚いなんていいたくないの。

みんなと一緒にでいたいのに。

「どうやって俺がこんな風になれたと思う？」

先輩の声は私の頭のすぐ上から聞こえた。

「とある無邪気なバカに教えられたんだよ。」

その声はとても温かい。その声がかかるところから少しずつ温まるように。

「魔法の言葉だ。一度しかいわないからな。」

耳元でささやかれたその言葉を、私は絶対に忘れることはないだろう。

先輩は私の身体を起こして、手を汚しながら泥を払ってくれた。

そして椅子に座らせてくれた。

向かい合って、先輩と向かい合って座った。

今の私は素の私。自然な私。感情がリセットされた私。生まれたときのような私。

今なら迷わずに本当のことが話せる。

私は先輩と目を合わせた。

さあ、

「ひらきな」

私はこれまでのこと、今日起こったこと、今思っていること、心を隠さず、何も飾らずに話しました。

もちろん心のビーカーのことも。

話してみるとなんだか胸がわくわくして、不思議で。

こんなふうに誰かに心を開いたことはあっただろうか？

正直にこんな私の、私だけのための話、したことがあったのだろうか？

先輩は信じられないくらいに、真剣な眼差しで聞いてくれました。ゆっくり話す私の言葉を、最後まで聞いてくれました。

話し終えたとき、気づくと雨は弱まっていました。心の穏やかさに水膏の目盛りをあわせるように。

「私はやっぱりみんなとは違うんでしょうか？」

背筋を伸ばして、膝に手を揃えて置いたまま座っています。

なにも、もうかつこうつける必要なんてありません。わかっています。

私にとってはこれが普通なのです。

「この世に同じ人間はいない。」

気持ちいくらいに先輩は言い切った。

「違うことは罪じゃない。むしろ自分を見失わない。みんな同じ性格なら自分が誰かわからなくなる。だろ？」

はいそのとおりです、と私は目をふせて頷いた。

気持ちの整理はつきます。

ではやはり私が他人と違っていて、そのことを肯定した上でそれでも苦しい思いをしたのは、今なおそれに耐えられなくなるのは、やはり私が汚いからなんでしょうか？

そう思いたくなんてない。けれども長い間の経験から説得力が増してしまっているのは否定できません。悲しいけれど。

「わたしは汚い人間だと思いますか？」

真剣な目で、先輩の目を見つめます。

容赦のない言葉で切り捨てられるかもしれませんが。ひょっとしたら先輩のことだから、優しい言葉で励まされるかもしれませんが。遠まわしに説明してくれるかもしれません。肩を抱いてくれるかもしれません。

そのいずれであっても、どんな形であつたとしても、先輩の本気の思いを私に打ち明けてくださるはずです。そう信じています。

それがたつたひとりの意見に過ぎなくとも、私は疑わないまま信じて受け入れて見せようと思います。

先輩は私のたった一人で、私の初めてだからです。

初めての人だからです。

先輩は、篠崎先輩は、篠崎明人先輩は、・・・明人先輩は、私のほつを本気の目で見つめています。

その目は強く、片目でもものを見る人には思えません。

二つの目よりも大きな、もっと大きな特別な目で、私を見返しているようです。

明人先輩は眉を細めます。

もしかしたら厳しい宣告に私の身を案じて心を痛めているのかも
しれません。

口元まで強く締め始めました。

大丈夫です。

今の私は大丈夫です。

負けません。

負けませんよ。

「ぶふう。」

そ、そんなあ。

明人先輩は何かおかしいのか、笑いを吹きだしてしまいました。

「ま！真面目にやってください！」

私がけっこう本気であきれて怒りそうなとき、明人先輩は自分の鼻をつついて私に何かを伝えようとしていました。

鼻？

途端に私の鼻の頭から天道虫が飛び立ちました。いったいいつからとまっていたんでしょう？話すことに夢中でまったく気がつきませんでした。

赤い軌道をゆらゆらと残して外へ飛んでゆく。外の世界へ。

そのときにはちょうど今なのか、それとも先ほどなのか、雨は止んでいた。

まるで音という音が世界からなくなったように、まるで音がしない。

それから、天道虫が草むらに消えた先から、光が

「ひかりが・・・」

眩し過ぎるひかりがゆつくりとゆつくりとその翼を広げて、薄暗かったバス停の屋根の下までも照らし始めます。

夕日にはまだ少したりない、斜めの太陽が雲の間からとびっきりの祝福の翼を捧げる。

この聖域に。二人の聖域に。明人先輩が連れ戻してくれた聖域に。思わず立ち上がった意味も忘れてしばらくその場に立ち尽くしました。

先輩、きっと私たち、きっと祝福されています。
明人先輩！

視線を戻した先では明人先輩がまだ必死に笑いを抑えて片手の平をこちらに向けていました。

「もう！先輩！！」

さすがに怒鳴りもします。

少しの間だけ、答えを出す前に、告げられる前に浸っていたかった。今度はあたたかい幸福に。

でも、前をむかなきゃ。
開いた心にはいるのは真実だけ。

私の信じるあなたの真実をどうか・・・

「つまりそういうことだよ。」

え？

先輩はまだ少し笑い顔です。
でもそれが何の笑顔なのかはもうわかりません。

「どういうことですか？」

いつの間にか先輩も立ち上がって、向かい合います。
さっきよりやわらかい空気で。

「信じたことに真剣だったり、差し込んだ光に見とれたり、おまえはさ。」

恥ずかしげもなく先輩は目をみていった。

「おまえは綺麗なんだよ。」

瞳孔がひらくのを感じた。

「おまえは綺麗過ぎて、他のやつがなんとも思わずに見せる人間の無意識な汚さにだって濁りを感じてしまう。」

変だな。もう枯らしてしまったはずなのに、目から涙が。

「他の多くの人のことが酷い、と目にうつってしまふのはそりゃあそつだ。おまえがもともと綺麗過ぎるんだ。基準が違うってだけ。」

耳で息をしてるみたい。呼吸に合わせて耳がびくびく動いてる。

「おまえは汚くなんてない。汚れてなんかいない。もう気持ちい

くらいに、やってらんねくらいに透き通ってんだ。」

どうしょ。今絶対鼻水でてるよお。でも絶対、目を離したくない。

「透明なんだよ。泥水に沈殿だったらぜってえ気づきもしねえって。」

もういい、もういいよ。明人先輩い。

「だから、おまえはその綺麗さを大切に、誇りにしな。な？」

そういつて明人先輩は私の頭をなでなでしてくれた。

とびつきたかった。

でも、

「でもそしたら明人先輩だって、つく、綺麗な人ですよ。」

そうだ。私と同じ目、感じ方、いき方の明人先輩だって同じはず。同じはず。

そういつと笑って、それが光に当たってまぶしくて。

「俺とお前は似ている。でも決定的に違うところがあるんだ。」

「ひつく……。なんれすか？」

「俺は独りのとき、まわりの人間を必死に責めた。自分があくまで正しいと言い切って、自分の存在を確かにしようとしていた。で

も、おまえは違う。俺と同じ独りでも、おまえは決して自分以外の人間を責めなかった。自分が悪いんだと、自分の中に押し込んだ。もちろんどっちだって間違ってるって今はわかる。だけどどっちかっていったらほら。」

ありがとうございます。

「おまえのほうが、綺麗にきまってんだろ？」

女性として、人生最大に取り乱した私はもう大丈夫、と涙をぬぐいきって呼吸を整えた。

そのあとふたりで同じ方向の帰り道を並んで歩いていた。

「私、うまくやれますかね？」

きつとこれはもう質問じゃない。

この幸福な日を終わらせたくないっていうわがままだ。
もちろん不安がないなんてことはない。
そんな人間どこにもいない。

これが普通よ。

「友達第一号も、作り直しかな……。問題はまだまだ山積みですし。」

すると前方を見たまま明人先輩は高らかに笑っていった。

「友達第一号なら、うってつけがいるぜ？」

「え？」

前方から、山道の足場の悪さを感じさせない勢いで疾走して来る制服姿があつた。

緑のリボン？同じ学年の人？

尋常ではない速さで目の前まできてしまった。
まさに、「とんできた。」ようだった。

「先輩ー！。心配しましたじゃないですかあ。通学路中探し回りましたよ！もお！」

その子は、もう元気いっぱい過ぎてみていて飽きない、強いて言うならサル目口リス科のゴールデンポッターの子どもを印象させるような雰囲気の子でした。

「なんでおまえにいちいち心配されねえといけねえんだよ？」

明人先輩は私と話すときとは少し違う、どこか心許しきってるような表情になりました。

いったい二人はどんな関係なんでしょう？

その子と目が合いました。

まさかすぐ左手にいた私に今まで気づかなかったというんでしょうか？

それほどに明人先輩しか見えていないんでしょうか？

「あ、おとなりさん！」

？

私と明人先輩が同時に疑問の声を放ちます。

「おとなりさん・・・？」

首をかしげてみます。

「うん。私んちのおとなりじゃん？」

「おまえ、こいつんちの隣に住んでんのか？」

「そうだよ。いつも帰ってきてるの。あの窓からみてたもん。」

「どういうことでしょうか？」

私は帰り道が同じ方向の人の多くとは一言ずつでも挨拶を交わしたことがあるはずなのに。

いえ、それ以前にお隣さんだなんて？

「何組・・・ですか？」

「3組だよ。」

その子は私に対して無邪気な笑顔を向けてくれました。

「あ、えーっと、こいつこの前まで入院しててさ、五月くらいにやつと退院したんだよ。それからもしばらく家からでれなくてさ。だからたぶんしらねえんだとおもっ。」

9年間皆勤を達成しそうな勢いのこの子がつい先月まで入院していたなんて。

どこがおわるいんですか？と聞きたくなりますが、やはり失礼ですよね。

「それはそうと、何？先輩？私のお隣さんといったい何してたの？まさか浮気？？？」

「なにが浮気だ。本命がねえだろが。」

「えー酷い！こんなに服もぼろぼろにしちゃってえ！絶対なんかされたでしょうお隣さん？」

心配そうに私をみつめる。なんて表情の変化が凄まじいんでしょう？

まるでついていけません。

「え？いや、いいえ。」

目まぐるしい。

でも確かにこの人なら明人先輩のいうとおり大丈夫な気がする。

いいえ。これから会う多くの人ともきつと。

「これで虹なんかみえると最高なんだけどな？」

明人先輩が右目を閉じて私にひよつと目を向けた。
ウインクのつもりでしょうか？

「えー。何？いきなりろまんちすとぶってるの先輩？」

元気なその子は指で先輩の胸をつつつきだしました。

「知ってるか？ピーカーにだって虹ができるんだぜ？」

どちらに言ったのか？明確ですね。

私は大好きだった小学校の放課後の理科室を思い出しました。

そこは私と理科の先生だけの秘密の空間で、実験や観察が大好きな私にその先生がいろんな実験を見せてくれたのを覚えています。

その中のひとつに、ピーカーで虹を作る、というのがありました。やり方は全然忘れてしまいましたが、透明な水の入ったピーカーと、黒い板と懐中電灯だけを使ってできる簡単なものだった気がします。

私は何度見てもその実験が大好きで、嫌なことがあった日には必ずそれを見ると心が落ち着きました。

ああ、懐かしい。

いまきつと私の心のビーカーにはあのときよりももっと綺麗な虹が、七色を輝かせているに違いないのです。

「わあ！先輩！お隣さん！みてみてえ！」

お隣に住む子は指を空たかくに向けて、そちらをみたまま元氣にはしゃいでいます。

山道を進むと現れる、背の高い木と木が開いて空が臨める場所。そのちようど真ん中に、美しい七色がありました。

「誰の虹だろうな？」

声がした気がします。

ああ、なんて綺麗なんでしょう。

そして明日からは、いったい何色の、何色の綺麗な毎日になるんでしょうか？

無垢

ビーカーいっぱい
の純粹

しなにもものも透す

なにもものも写

光を混ぜれば化学反応

純粹無垢が七色に

藍
紫

赤
橙
黄色
緑
青

心と心の橋渡し

七色の橋を

君に渡すよ

（後書き）

ここまで読んでいただいて本当にありがとうございます。

心を込めた作品ですので、感想を書いていただけると幸福の極みです。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7246j/>

『 雨空に七色を 下 』

2010年10月10日18時37分発行